

令和3年度 教育論文

研究主題

小中のズレに向き合い、9年間の学びを生み出す  
小中一貫教育の土台づくり  
～共通の組織構造の設定、文化の構築、目指す姿の共有を通して～



中学校教員による乗り入れ授業



小・中学校教職員の日常会話



年間を通じた小中合同研修



小・中学校の開校行事

合志市立合志楓の森中学校

合志市立合志楓の森小学校

## はじめに

2021年4月、合志楓の森小学校・合志楓の森中学校の両校（以下、「本校」と言う。）は、同じ敷地内にある新しい学校として開校した。中島 栄治 合志市教育長が提言されている「夢実現プロジェクト」でも強調されているように、小中一貫教育の推進は、小学校から中学校に進学した際の諸問題（いわゆる中1ギャップ）の解消や中学生が自尊感情を高めることなどにつながり、大変有効であると考えられている。

本校では、同じ敷地内に小・中学校があるという利点最大限に生かした小中一貫教育に取り組もうと指向し、今年度開校当初から、小中合同の研究テーマで校内研究を行おうと考えていた。

しかし、本校が立ち上がると間もなく、同じ敷地内に小・中学校があるというだけでは、小中一貫教育が進まないことに気が付き始めた。小学校と中学校では、とりわけ対象とする児童生徒の発達段階や教職員の専門性に違いがあることから、小・中学校間には様々な認識のズレがあり、教職員間や学校間には、「見えない壁」とでも言うようなものが立ちはだかった。つまり、同じ敷地内にあることで本校では容易に小中一貫教育が進むとの考えは短絡的で、ハード面に加えソフト面も補完されなければ、小中一貫教育が有効に成立しないことを目の当たりにしたのである。

まずはカリキュラムのPDCAサイクルを回していこうと、研究テーマや実践内容を検討したが、思うようには進まなかった。研究が進まない現実を前にして、「合同研修の本丸であるカリキュラムのPDCAサイクルに取り組むためには、その前提としてもっと大切なものがあるのではないか。」と考えるようになった。

そのような状況で、カリキュラムに関する田村他(2016)の研究は、大きなヒントとなった。その中には、「組織構造」と「学校文化」に着目する記述が見られ、違いがあって当たり前の小学校と中学校が一緒に小中一貫教育の推進を目指すのであれば、2校の「組織構造」と「学校文化」に働きかけることこそ、本来進めたい「カリキュラムのPDCA」につながるのではないだろうか。すなわち、今年度を小中一貫教育の土台づくりの1年と捉えるなら、丁寧に小中のズレに向き合い、9年間の子どもの学びを深く考えた取組を行うための素地を構築していく必要がある。

そこで、「小中のズレに向き合い、9年間の学びを生み出す小中一貫教育の土台づくり～共通の組織構造の設定、文化の構築、目指す姿の共有を通して～」を中学校区の研究主題として設定し実践を行うこととした。

## 目次

はじめに

I	研究主題	1
II	研究の目的	1
	1 小中一貫教育推進における課題	
	（1）小中一貫教育の必要性（合志市の教育目標から）	
	（2）開校当初の実態と多くの学校で共通してみられる状況から	
	（3）小中一貫教育の土台づくりの必要性	
	2 研究の目的	
III	研究の仮説	3
	1 研究の仮説	
	2 研究主題にせまるための研究の構想図	
IV	研究の進め方	5
	1 仮説を検証するための視点	
	（1）視点1 まず同じ土俵に～組織構造の設定～	
	（2）視点2 ズレを知り合う～学校文化の構築～	
	（3）視点3 15歳時の目指す姿の共有～カリキュラムのPDCA～	
	2 視点のための手段	
V	研究の実際と考察	7
	1 まず同じ土俵に～組織構造の設定～	
	（1）小中共通の校務分掌の設定	
	（2）縦割りの児童会・生徒会活動の設定	
	（3）乗り入れ授業による多様で質の高い学び	
	（4）教師や児童生徒の無理のない動きを生み出す日課の設定	
	（5）自ら学ぶ児童生徒を目指した「夢ノート」の実施	
	2 ズレを知り合う～学校文化の構築～	
	（1）小・中学校職員の関わりの機会の設定	
	（2）日常生活における会話のきっかけ増加	
	（3）小中合同研修の日常化	
	（4）小・中学校の互いの専門性を活用	
	（5）ICT活用など効果的な教育活動に挑戦する学校文化	
	3 15歳時の目指す姿の共有～カリキュラムのPDCA～	
	（1）「めざす資質・能力」の具現化	
	（2）児童生徒の言葉を反映	
	（3）9年間の「学びの指標」の作成	
VI	研究の成果	17
	1 職員へのアンケートの結果から	
	2 児童生徒アンケートの結果から	
VII	今後の課題と来年度に向けて	20

## I 研究主題

小中のズレに向き合い、9年間の学びを生み出す  
小中一貫教育の土台づくり  
～共通の組織構造の設定、文化の構築、目指す姿の共有を通して～

## II 研究の目的

### 1 小中一貫教育推進における課題

#### (1) 小中一貫教育の必要性（合志市の教育目標から）

合志市では、すべての小中学校で小中一貫教育を推進している。合志市の具体的実践事項の重点事項にも「小中一貫教育を中心に据え、教育の充実を図る」が掲げられている。また、「～志合わせて夢実現プロジェクト～」の中でも、「小学生が中学生にあこがれをもつこと」や、「小中一貫教育を柱として」という言葉が書かれている。より良い家庭人に成長していくためにも小中一貫教育が今求められている。特に小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不登校等の生徒指導上の諸問題につながっていく事態（いわゆる中1ギャップ）が多く報告されている。少子化の進行や地域コミュニティの弱体化、核家族化の進行により児童生徒の人間関係が固定化しやすい中、小中連携、一貫教育の実施により、児童生徒が多様な教職員、児童生徒と関わる機会を増やすことは、小学生の中学校進学に対する不安感を軽減することにつながる。さらには、中学生が小学生との触れ合いを通じ、上級生である自らに自覚的となることで自尊感情を高め、生徒の暴力行為や不登校、いじめの解消につなげていくことにもつながる。

本校は、同じ敷地内での「一体型」として小中一貫教育を推進している。合志市で取り組む小中一貫教育の中でもより強固な小中連携を目指した取り組みを推進するためにも本校が設置されている。そのため、本校で小中一貫教育の土台づくりを開校からどのように推進していくのかを整理することは、合志市の各中学校区の小中一貫教育の推進につながると考えている。

#### (2) 開校当初の実態と多くの学校で共通してみられる状況から

小学校の教員は全教科を教えるのに対し、中学校の教員は特定の教科を指導することや、小学校と中学校では、対象とする児童生徒の発達の段階が異なることから、学習指導・生徒指導の方法が異なるといったこともあり、教職員の職務の性質は自ずと異なってくる。

そのため、校種の壁が職員の中にも存在する。本校でも、開校当初は、広い職員室の中で小学校・中学校の教職員が関わることは少なかつた。開校してからの準備や運営に追われてお互いに話をすることが少なく、「自然のまま」ではなかなか小学校・中学校の職員が関わることはない状態が続いた。また、「小学校だから」「中学校だから」という固定概念があり、互いの違いを知ろうとすることも少なかつた。学習環境、時間の流れ、考え方の違いなど、小学校と中学校のもつ「文化の違い」に教職員の戸惑いも大きかつた。

児童生徒の中にも、小学校と中学校は別のものだという考えが少なからずあつた。開校してすぐはほとんど関わりもなく、小学生は「中学生だからできて当たり前。」というように中学生に憧れをもつ姿は見られなかつた。中学生からも、「小学生には優しくしないといけない。」という声が聞かれ、お互いに遠慮していて小学生と中学生が関わることは少なかつた。

小学校の教育目標は、「自分で考え行動できる子どもの育成」である。中学校の教育目標は「夢と誇りを持ち、自分らしく主体的に行動できる生徒の育成」である。どちらも子どもが主体的に自ら考えて行動できる児童生徒の育成を目指している。しかし、大きな方向性は同じでも職員一人一人の意識や児童生徒の意識にはズレが生じる。そこで、具体的な実践事項や取り組むべき内容を全職員および児童生徒と共有することが必要となる。小中合同研修の中で、小・中学校教職員間の違いを教職員同士が認めた上で互いに学び合い、義務教育9年間を通して児童生徒を育てる発想を持つよう、教職員に対し促すことにより、少しずつ互いを知る機会をもつように変化させ、互いの意識の共有を図ることとした。

### (3) 小中一貫教育の土台づくりの必要性

どの学校区でも小・中学校にはズレが生じる。学校の中には様々な見えない壁があるからだ。妹尾は『学校のなかにはさまざまな見えない壁、少なくとも五つの壁がある<sup>1)</sup>』と述べているが、本校においてもその壁を痛切に感じさせる場面が多々見られた。「学年の壁」「学級の壁」「教科の壁」「職の壁」などである。「よその学年のことはよくわからない」「自分のことで精一杯で他のクラスことまで見る余裕がない」という考えは、少なからずどの学校にもある。小学校と中学校ではシステムにも違いがあり、環境面、考え方等お互いをよく知っている学校は少ない。そのため、本来取り組むべき

カリキュラムのPDCAや共通実践にいきなり取り組むことは難しい。

田村は『一人ひとりの教師が学校としての目標やカリキュラムを十分に理解し納得した上で、主体的・自律的に実践に取り組めるようマネジメントする<sup>2)</sup>』と述べている。田村が示しているカリキュラムマネジメント・モデルの中では、「組織構造」と「学校文化」がすべての「カリキュラムのPDCA」を支える形をしている。つまり、「組織構造」と「学校文化」はカリキュラムのPDCAを動かすためには欠かせないものである。だからこそ、ズレに向き合い、「組織構造」と「学校文化」を中心に、小中一貫教育の土台づくりをしっかりと行うことが小中一貫教育の推進に向けて重要であると考える。

## 2 研究の目的

小・中学校で校務分掌や特別活動など共通の組織構造を設定し、様々な教育活動を協働的に行いながら学校文化の醸成にはたらきかけ、15歳卒業時までの目指す姿を共有することで、中学校区の教育目標の実現を目指す土台を構築することを目的とする。

以上のことより、研究主題を「小中のズレに向き合い、9年間の学びを生み出す小中一貫教育の土台づくり～共通の組織構造の設定、文化の構築、目指す姿の共有を通して～」と設定した。

## Ⅲ 研究の仮説

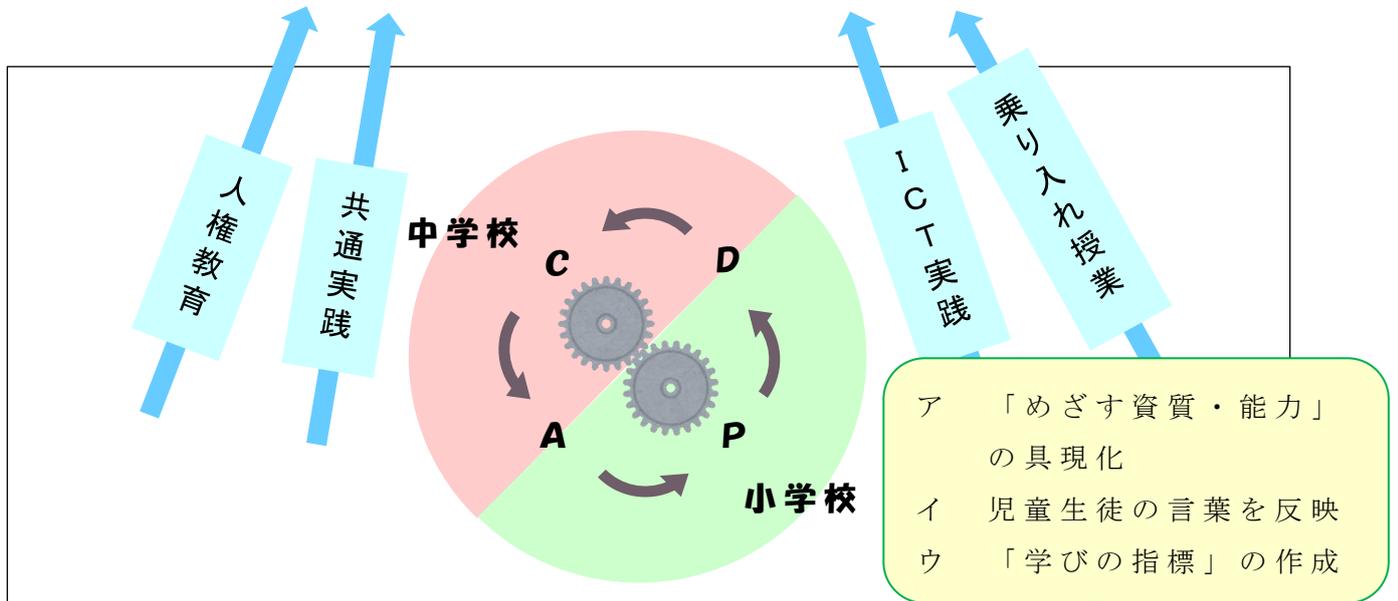
### 1 研究の仮説

仮説1	まずは同じ土俵に～組織構造の設定～
	小・中学校のカギとなる「組織構造」を共通のものに設定することで、小中の交流が生まれやすくなるであろう。
仮説2	ズレを知り合う～学校文化の醸成～
	小中でズレを共有したり、意見交流の場を設定したりすることで、9年間を見通した学びについて話し合う「学校文化」の醸成を図ることができるであろう。
仮説3	15歳時の目指す姿の共有～カリキュラムのPDCA～
	仮説1と仮説2を同時進行で行いながら、中学校卒業時の姿を明確に共有し、それまでの道のりを小・中学校の教職員が児童生徒と共に考えることで、9年間の学びの連続性を踏まえた見通しを教師も児童生徒も共有し、小中一貫教育推進に向けた土台づくりができるであろう。

## 2 研究主題にせまるための研究の構想図

〈中学校区学校教育目標〉

自他の存在を大切にし、自ら考え、自ら行動する児童生徒の育成



### カリキュラムのPDCA 仮説3

仮説1と仮説2を同時進行で行いながら、中学校卒業時の姿を明確に共有し、それまでの道のりを小・中学校の教職員が児童生徒と共に考えることで、9年間の学びの連続性を踏まえた見通しを教師も児童生徒も共有し、小中一貫教育推進に向けた土台づくりができるであろう。

### 組織構造 仮説1

小・中学校のカギとなる「組織構造」を共通のものに設定することで、小中の交流が生まれやすくなるであろう。

- ア 小中共通の校務分掌
- イ 縦割りの児童会・生徒会活動
- ウ 乗り入れ授業による学び
- エ 共通日課の設定
- オ 自ら学ぶ「夢ノート」の実施

### 学校文化 仮説2

小中でズレを共有したり、意見交流の場を設定したりすることで、9年間を見通した学びについて話し合う「学校文化」の醸成を図ることができるであろう。

- ア 小・中学校教職員の関わり増加
- イ 日常生活における会話の増加
- ウ 小中合同研修の日常化
- エ 互いの専門性を活用
- オ 挑戦する学校文化

※田村（2016）のカリキュラムマネジメント・モデルをベースに設定

## IV 研究の進め方

### 1 仮説を検証するための視点

#### (1) 視点1 まずは同じ土俵に～組織構造の設定～

小・中学校の交流の土台づくりとして、まずは「組織構造」を共通のものに設定することとした。共通の組織構造をもつことで、職員同士の交流が生まれ、児童生徒同士の交流も自然と生まれると考えた。また、日課や時間割を共通にすることで、乗り入れ授業が可能となり、よりスムーズに小中の交流ができるであろう。

#### (2) 視点2 ズレを知り合う～学校文化の醸成～

小中のズレをまずは職員が知ることが大切だと考えた。小中合同研修や日常会話の中で多くの交流の場を設定することで、小中でズレを共有したり、意見交流の場を設定したりすることができると考えた。ズレを知り合うことで、9年間を見通した学びについて話し合う「学校文化」の醸成を図ることができるであろう。

#### (3) 視点3 15歳時の目指す姿の共有～カリキュラムのPDCA～

教職員と児童生徒が中学校卒業時の目指す姿の共有をすることが小中一貫教育の土台づくりにつながると考えた。仮説1と仮説2を車の両輪と捉えて同時に進めることでカリキュラムのPDCAの土台ができる。その土台を基に、中学校卒業時の姿を明確に共有することができる。9年間の学びの連続性を踏まえた見通しを教職員も児童生徒も共有し、来年度以降の小中一貫教育の土台づくりができるであろう。

### 2 視点のための手段

#### (1) 仮説1に対する手段

ア 小中共通の校務分掌を設定することを通して、学校教育活動につながりを持たせる。

イ 縦割りの児童会・生徒会活動を設定することで、児童生徒の学び合いを生み出し、学びの連続性を教職員や児童生徒が意識できるようにする。

ウ 乗り入れ授業により小・中学校それぞれの強みを発揮することで、より多様で質の高い学びを生み出す。

エ 共通の時間割を設定し、生活のルールを決めることで、児童生

徒や教師の無理のない動きを生み出す。

- オ 小学校高学年から共通の生活ノートを使うことで、小・中学校教職員の交流を生み出す。

## (2) 仮説2に対する手段

- ア 行事等における単純な作業を共同して行うことで、小・中学校教職員の関わりの機会を増やす。
- イ 小・中学校合同でおしゃべり活動を行うことで、その後の日常生活においても話すきっかけをつくる。
- ウ 小中合同研修を日常化することで、常に児童生徒の育ちのつながりを意識した議論ができるようにする。
- エ 小・中学校の互いの専門性を活用することで、互いの成長や学びの機会にし、支え合いを生む。
- オ ICTを活用することで、児童生徒にとって、より効果的な教育活動への挑戦する学校文化を生み出す。

## (3) 仮説3に対する手段

- ア 小中合言葉の「資質・能力」を小・中学校の教職員の言葉で決定していくことで、自分たちで学校教育目標に向けて実践している意識を高める。
- イ 児童生徒の言葉を小・中学校の合言葉に反映させることで、教職員と児童生徒が共に同じ目標を持って教育活動に当たることができるようにする。
- ウ 「9年間の学びの指標」を、横割り、縦割りで綿密に議論することで、小・中学校で互いに大切にしたいことや現状を互いに知り合い、学びの連続性を考えた評価項目を作成する。

## V 研究の実際と考察

### 1 まずは同じ土俵に～組織構造の設定～

#### (1) 小中共通の校務分掌の設定

年度当初、数校の小・中学校の校務分掌を比較したところ、小学校にしかないもの、中学校にしかないものなどがあることに気づいた。小・中学校それぞれで校務分掌を決定してしまうと、図1のように小・中学校の共有施設利用やルールについて実働する分掌部が異なることによる考え方のズレが出てきた。まずは、小・中学校で話し合う土俵に乗るために、共通の校務分掌を設定した。その際、大枠を共通のものにすることに特に重点を置いた(図2)。このことにより、共有施設利用やルールについて小・中学校の各校務分掌部主査同士がスムーズに話すことができるようになった。また、大枠を共通のものにすることのみ行ったことで、小・中学校が独立して活動する校務分掌の設定も無理なく行うことにもつながった。

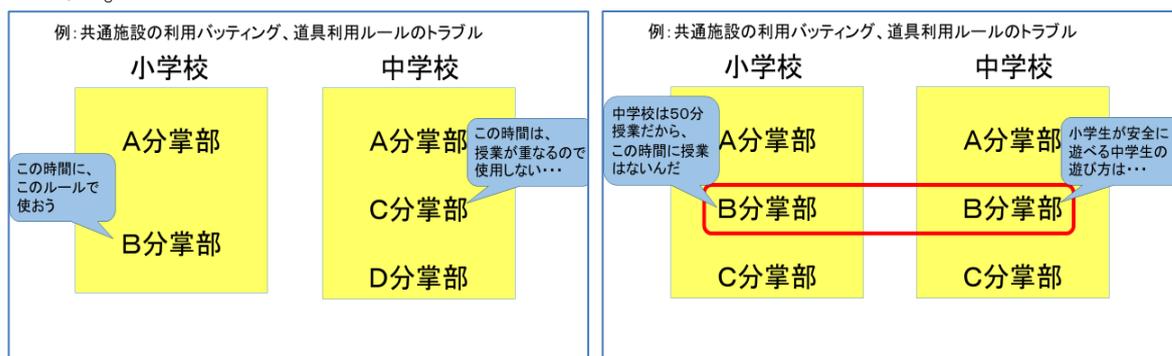


図1 校務分掌のズレ

図2 共通の校務分掌

#### (2) 縦割りの児童会・生徒会活動の設定

職員の校務分掌だけではなく、児童生徒が主体となる児童会生徒会活動も共通の組織構造が必要不可欠であると考え、共通の委員会活動を設定した。このことにより、同委員会に属する児童生徒、小・中学校教職員が一緒に年間計画を検討することが可能になった。まず、同委員会に属する小・中学校教職員が協議し、主な活動内容を検討した。次に、成長モデル<sup>3)</sup>を活用して、小・中学校の各委員会の委員長(児童生徒)が中学校区の教育目標を実現するために取り組みたいこと(アクションプラン)を作成した。中

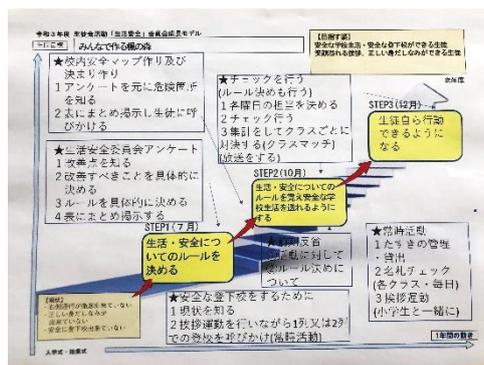


図3 委員会の成長モデル

学生は、中学校卒業時のゴールの姿と現状を分析して活動を企画し（図3）、小学生は中学生が作成した成長モデルを参考にして小学校の間に取り組みたいことを考え、成長モデルを作成した。小・中学校ともに成長モデルを用いたことで、ゴールの姿や学びの連続性を意識した活動を設定することができた。また、小・中学校で共通の成長モデルを使用することで、学びの連続性を意識した目標の設定ができた。共通の成長モデルを使うことで、教師と児童生徒が共通して目指す姿を達成できるような仕組みづくりを進めた。

### （3）乗り入れ授業による多様で質の高い学び

本小・中学校では、中1数学の少人数授業を小学校の教員が行い、小6理科の授業、小5・6家庭科の授業、小6外国語の授業を中学校教員が行っている。

中1数学は、中学校に入学した生徒にとってはハードルが高い部分もある。そこで、中1数学の特に少人数教室の子どもたちに小学校の教員が丁寧に授業を行うことで学力の向上を図りたいと考えた。また、小学校の理科、家庭科、外国語活動はどれも専門性が高く、中学校教員の専門性を活かした授業により児童の興味関心をさらに高めることができると考えた。

例えば、中1数学では、小学校の教員の個別指導のスキルを活かして、学習が苦手な生徒に対しても丁寧に学習が進められるように支援した（図4）。細かな見取りや視覚的な支援などのUDの視点に立った指導を中学校においても進めることができた。特に導入の工夫は、小学校の教師ならではの発想で生徒の意欲づけがされており、生徒も安心して学習に取り組むことができていた。

小6理科では、中学校の学習内容を意識して「顕微鏡」を使って実験観察を行うなど、より確実な技能の習得を目指すことが可能になった（図5）。また、中学生が使っている理科室を小



図4 小学校教員による  
中1数学の授業



図5 中学校教員による  
小6理科の授業

学生も使うことができるため、中学生が使っている実験道具を見て、「これなんですか?」「いつこの実験できますか?」と尋ねる小学生が増え、興味関心を高めることにもつながった。

小6外国語では、チャンツや英会話だけでなく単語を書く練習など、中学生の学習にもつながりのある授業を行った。

小5家庭科では、炊飯やミシンなどを専門的な知識をもった教員が指導をすることで児童もスムーズにポイントを理解して学習を進めることができた(図6)。

さらに、乗り入れ授業を通して小学校と中学校の職員が関わり合う機会が増えた。それまでは職員室の中でも小学校のスペースに中学校の職員が入る

ことは少なかったが、授業の打ち合わせや児童生徒の細かな気づきを共有するために教職員同士の交流が必然となった。これはお互いにとってよい刺激となり、お互いの指導力向上にもつながった。

「小学校の教室の掲示物を見ていると、よく考えられていてとても気になる。実際に話を聞きに行くと、自分の学級に取り入れたものもある」

上記の内容は、中学校教員の言葉である。乗り入れ授業を行うことにより職員はお互いの学習内容や発達段階を意識して授業を行うようになった。学びの連続性を意識した教育活動の推進のためである。児童・生徒の学びの質の向上だけでなく、教師の指導力向上にも効果があることがわかった。

#### (4) 教師や児童生徒の無理のない動きを生み出す日課の設定

小・中学校では、教育課程も授業時間も異なる。同じ施設で学校生活を送るために、発達段階に合わせて共通のルールを設定する必要があった。始業時間やチャイムの有無、給食の準備や掃除など児童生徒の1日の生活を考えて日課やチャイムを決めた。

授業の始まりの時刻を揃えるために休み時間の長さを調整し、給食や掃除、昼休みを小学校と中学校が同じ時間にできるようにした。このことにより、共通の日課を設定することで、乗り入れ授業が可能となった。また、今後は縦割りの清掃活動や昼休みの小・中学校イベント運営なども検討できる日課となった。



図6 中学校教員による  
小6家庭科の授業

## (5) 自ら学ぶ児童生徒を目指した「夢ノート」の実施

また、合志市で進められている「夢実現プロジェクト」の中にある「生活ノート」も小学校と中学校で共通のものを作成した。生活ノート部会を設定し、小中学校それぞれの生徒指導主任、教務主任、研究主任、小中一貫教育主任、特別活動主任、特別支援教育主任、学年主任が参加して、内容や表記の仕方を協議した。生活ノート

(図7)には、小学生が今後の見通しを持てるように中学校の生徒指導部が作成した生活のルール、研究部が作成した学習の仕方なども入れた。小学校高学年から中学3年生までが共通して使えるものを作ることを目的に、毎日の記録は柔軟に記入

図7 小中共通の生活ノート

ができるようにした。すべてを記入させるのではなく、発達段階に合わせて記入する内容を絞ったり、音読カードの代わりに使ったりと工夫次第で他のノートと併用できるようにした。

生活ノート部会で何度も話し合う中で、小・中学校共通のルールや15歳までに身に付けてほしい力などについても自然と議論することが多くなった。その中で、授業開始時の黙想などは、小学校高学年だけではなく、小学校中学年も取り組むことが検討され、小・中学校教職員が実感を伴って小・中学校の共通実践として取り組むこととなった。

(1)～(5)より、様々な教育活動において共通の組織構造を設定したことで、小・中学校の各校務分掌担当者で主体的に話し合う機会が増えた。

## 2 ズレを知り合う～学校文化の構築～

### (1) 小・中学校教職員の関わりの機会の設定

開校当初、同じ施設内にあっても小学校の職員と中学校の職員が関わる機会はほとんどなかった。同じ職員室を使っている、互

いのスペースに入っていく教職員は少なかった。そこで、まずは小学校と中学校の教職員の関わりの機会を増やすことから始めた。入学式など共通の行事の準備と片付けは小・中学校の教職員が関わ合うよい機会となった。はじめは作業をするときにも小学校の教職員と中学校の教職員が話をすることは少なかったが、多くの職員が少しずつコミュニケーションを取りながら作業するようになっていった。

「小学校の入学式は掲示物などがとても丁寧に作られている」

「中学校の入学式は、厳格な雰囲気がある」

「体育館は体育館シューズで入るからマットを準備する」

上記のように、お互いの文化に対し、交流する姿があった。また、教職員だけではなく、小学校の入学式の準備は中学2年生が手伝った（図8）。中学生は久しぶりに見る小学生の机や椅子に「椅子が小さくてかわいい。」と最上級生として後輩を見守る様子があった。ちょっとした作業だが、行事を通して小学校と中学校のつながりを感じられた。



図8 中学生が行う小学校入学式の準備

12月に行われた開校行事では、運動場に全校生徒で人文字を作った（図9）。前日に小中学校の教職員と中学生が運動場に印をつけていった。自然と小中学校の様々な教職員が手伝う姿や、中学2年生が手伝う様子が見られた。また、その様子を見た他の教職員は、小学校低学年の子どもたちが運動場の線を踏まないように放送をしたり、学童保育に連絡を入れたりと教職員が必要なことを考えて行動するようになった。



図9 開校行事の様子

はじめは関わりが少なかった教職員同士も、次第に関わる機会が増え、一緒に活動を行うことが当たり前の雰囲気ができてきた。

## （2）日常生活における会話のきっかけ増加

行事などの機会を通して小・中学校の教職員の会話が増えた。特

に日常のコミュニケーションが増えたと感じるのは、乗り入れ授業をしている教科担当と担任である（図10）。授業の中での気づきや、必要なことなどを休み時間や放課後に話すことが増えた。児童や生徒の様子を交流するだけでなく、お互いに意見交流をすることで教材研究の幅も広がった。教職員同士の日常会話の中で、小学6年生と中学1年生と一緒に昼休みに遊ぶという企画も生まれ（図11）、お互いに楽しみながら活動していた。中学1年生は中学校では新入生であり、中学校では教えられる場面が多いが、6年生と遊ぶときにはお兄さん、お姉さんの顔になり優しく接する様子が見られた。また、小学5年生から二重跳びのお手本をしてほしいと頼まれて中学1年生が昼休みにうれしそうに運動場へと駆け出していった。中学生にとって頼られることが大きな自信につながるということがわかった。



図10 職員同士の日常会話

このように、小中の垣根を越えて日常的にコミュニケーションを取りやすい環境ができてきたことで、異なる校種の教職員の交流の機会を増やすことができ、そのことが児童生徒の交流にもつながった。

### （3）小中合同研修の日常化

校内研修についても、基本的に小・中学校の教職員が一緒に行うこととした（図12）。はじめての合同研修のときには、多目的室に全員が集まったものの、やはり学年部ごとに集まっていることが多かった。この学校のおよさや互いに知りたい事など小グループを作って話しあったが、前述したように学年の壁が大きかった。そこで、校内研究を進めるにあたり、できるだけ小中学校の教職員が混ざった部会ごとに活動を行うこととした。はじめは「小学校の職員だけで話し合った方が、意見は出やすい」「小中合同で行う目的



図11 小・中学生の交流



図12 小中合同研修

がはっきりしない」「何のための研修なのか」など教職員からの意見もあった。しかし、回を重ねるごとに小中合同で設置した部会の教職員同士でのコミュニケーションが活発になり、「部会で話し合う時間をもう少しとれないか」という意見も出てきた。

合同研修では、小中の担当同士が話し合っただけで研修を進めるため、教員一人ひとりの負担軽減にもつながった。人権教育や道徳教育、「熊本の学びスタートアップ研修」など、小中合同で行うからこそ新たな視点が生まれ、より充実した研修となった。同じ中学校区の教職員全員が一斉に学べる環境をつくることで、9年間を見通した学びについて議論する素地ができた。教職員同士の様々なコミュニケーションを通して、小中間のズレを知り合う機会を増やすことは、学校文化の醸成を推し進めた。

#### （４）小・中学校の互いの専門性を活用

日常的なコミュニケーションは互いの良さを認め合うよい機会となる。小学校の養護教諭は、保健室にある流し台の高さが、小学生にとって高いと悩んでいた。それを聞いた、中学校の技術科担当教員が踏み台を作り、提供した（図13）。コロナ対策でパ



図13 保健室の踏み台

ーターションが必要なときには小・中学校の校長が特別教室等で使えるように自作した。ロビーの大きなホワイトボードの活用方法に悩んだ時には、小学校の教職員が委員会ごとの掲示板を作成して利用した。開校してしばらくすると、お互いの得意分野を活かして教職員が動くようになってきた。

小学校では、低学年の指導に視覚的な支援をする学級が多く、1日の流れや学習の流れを可視化したものを掲示している。中学校でも、視覚的な支援を必要とする生徒は多いため、小学校の教室を参考にして、声のものさし表や学習の流れなどの掲示物を作成する姿が見られた。

#### （５）ICT活用など効果的な教育活動に挑戦する学校文化

GIGAスクール構想の一環として、児童生徒一人ひとりにタブレットPCが配付された。xSyncやTeamsなどのソフトウェアも活用しながら、個別の最適化を進めることが求められている。ICT

Tを活用することでより効果的な教育活動へ挑戦する学校文化を生み出す取組を進めた。

特に、6月の導入後すぐに取り組んだのはオンライン授業の準備である。まずは生徒の発達段階を考慮して中学校が試験的にオンライン授業を全学級で行った（図14）。小学校の教職員は中学生の様子や取組を参考にしながら低学年には特に丁寧に指導した。それを活かして小学校では、



図14 中学校オンライン授業

9月のオンライン分散登校の期間中は低学年も教科担任制を導入した。中学校の授業を参考に、学年部で教科担任をつくって授業を行った。小学校では教材研究の時間が生まれ、学年が1つのチームとなり授業づくりに取り組むことができた。中学校では、単元を見通した学びとするために、分散登校の前に1単元分のワークシートを配付し、生徒が見通しをもって学習ができるようにした。また、すべての授業にICTをサポートするための職員が入り、チームで取り組んだことで、全職員がオンライン授業に安心して挑戦することができるようにした。このようにして、ICTを活用した教育活動へ協働して挑戦する学校文化を生み出していった。

(1)～(5)により、合同研修や日常的な作業を共に取り組む中で、小中のズレを知り合い、互いの強みを生かす学校文化の醸成につながった。前述した1、2において共通の組織構造の設定とズレを知り合う学校文化の醸成を図ることができたことで、合同研修の本丸とも言えるカリキュラムのPDCAに小・中学校の全教職員で着手することが可能になった。

### 3 15歳時の目指す姿の共有～カリキュラムのPDCA～

#### (1)「めざす資質・能力」の具現化

カリキュラムのPDCAのためには、小・中学校全教職員が「15歳時の目指す姿」を共有することが重要になる。「共有」と一言で言っても、各教職員がイメージする中学校区の教育目標は必ずしも一致していない。そこで、中学校区の教育目標に対して共通のイメージを持つことができるよう、中学校区の教育目標を具体的な資質・能力(〇〇する力等)として落とし込む活動を行った。言わば、中学校区の教育目標を目指すための「合言葉」である。

小・中学校の教職員が必ず入るグループを作成し、そのグループで「子どもたちに身に付けさせたい力」を考えた。小学1年生の担任と中学2年生の担任など、目の前の子どもたちの発達段階が大きく離れた教職員が集まるようにグループを編成した(図15)。関わる児童生徒の発達段階は異なっているけれども、大切にしたいこととしての共通点は多く、中学校区の教育目標に向けて目指していることは大きく変わらないという意識づけにつながった。



図15 小中教職員がともに入る合同研修のグループ

図16に示したマトリクスシートをもとに、「テーマ(中学校区の教育目標)との関連性」「汎用性」だけでなく、「先進性」も考慮し、「目指す資質・能力」を考え、それらをグルーピングして、資質・能力の3つの柱をふまえて整理した。その中で、今年度目指す方向性として「やりぬく力」「伝える力」「協働する力」の3つを合言葉とすることに決定した。

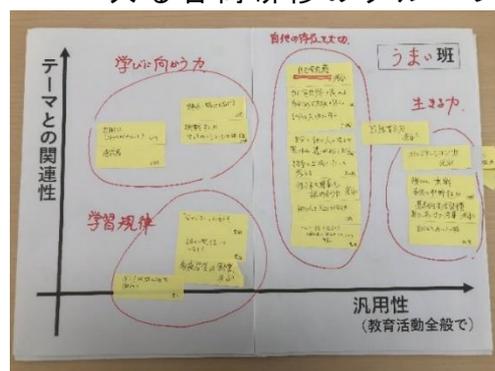


図16 マトリクスシート

## (2) 児童生徒の言葉を反映

小・中学校教職員だけではなく、児童会生徒会の児童生徒も、中学校区の教育目標を達成するためには、どのような力が必要かを考える活動を行った。また、中学校区の教育目標を念頭において、小学校卒業時、中学校卒業時にどのような姿になっていたか、学習面と生活面の両方で考えた。図17は、小学生、中学生が考えた「身に付けたい力のイメージ」と「卒業時に目指したい姿」である。

児童生徒は学校の代表として自分たちがめざす姿を考えられることをうれしそうにしていた。また、中学2年生の代議員の生徒は学校全体のことを考えた上で卒業するときの姿を考えるきっかけになった。その中で、中学2年生が最上級生としてこの学校を引っ張っていこうと高い意識をもっていることがわかった。

校内研修 3つの力 (小学校 企画委員会)	
○やりぬく力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最後まであきらめない</li> <li>・目標達成</li> <li>・自分で計画する</li> <li>・自分にできることをやりとげる</li> </ul>
○伝える力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いや考えを伝える</li> <li>・相手の意見を受け止める</li> <li>・グループで話し合う</li> </ul>
○協働する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・助け合う</li> <li>・自分ができるところを、みんなで集めて大きな力にする</li> <li>・協力して実行する</li> </ul>

合志橋の森中学校 代議員2年生 「子どもたちが考える、めざす姿」	
	<p>めざす姿 (卒業するときどんな姿になっていたいですか?)</p>
やりぬく力 ・意や目標を思い強く ・意や目標に向かって努 める ・最後まで諦めずに挑戦 する	<p>学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○わからない問題をわかるまで理解しようとする粘り強い姿。</li> <li>○わからないところも先生や友達に聞いてわかるまでやりぬく。</li> <li>○わからないところも問題を解き、わかるようにする。</li> <li>○自分の目標を立て、そこに向かって努力をする。</li> <li>○友達に聞いたり、教えたりして学びを深める。</li> </ul> <p>生活</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の仕事に責任を持ち、それを最後まで一生懸命にやりぬく姿。</li> <li>○困難を乗り越え、失敗を恐れずに努力する。</li> <li>○部活動やクラブをしっかりとして、礼儀を正す。</li> <li>○部活動やクラブを一生懸命する。</li> <li>○自分から進んで進んでも挑戦する。</li> </ul>
伝える力 ・自分の考えや思いを表 現する ・相手の考えを最後まで聞 く ・相手に応答できるように工 夫する	<p>学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自ら進んで話し、自分の考えを伝え、周りの考えに共感できる姿。</li> <li>○自分の意見を述べ、みんなにわかるように発表する。</li> <li>○異なった意見などは自分の意見でせんと書く。</li> <li>○人の話を最後まで聞く。</li> <li>○発表するときは声を出す。</li> </ul> <p>生活</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○いじめや差別などしてはいけないことに注意できる姿。</li> <li>○自分から進んで話し、礼儀を正す。</li> <li>○大きな声では話せと話す。</li> </ul>
協働する力 (押し合う力) ・みんなの納得する方法 で話し合う	<p>学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○部活動などで意見を述べて出し、それをまとめることが出来る姿。</li> <li>○自分の意見を述べて行動する。</li> <li>○友達と協力して、教えたり、教えられたりする。</li> <li>○公共物を守り守る。</li> </ul> <p>生活</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○全員で協力して清掃活動などができる姿。</li> <li>○いろいろな人の考えを聞く。</li> <li>○自分が思ったものは伝えると片付ける。</li> <li>○自分の仕事に責任を持つ。</li> </ul>

図 1 7 小学生、中学生が考えた 3つの力と「めざす姿」

### (3) 「9年間の学びの指標」の作成

児童生徒の意見を取り入れながら「学びの指標」の作成を行った。この指標は、来年度からのカリキュラムのPDCAの際に使用するルーブリックの原型となる。合同研修の第1次に、合言葉である「やりぬく力」「伝える力」「協働する力」について、学習面、生活面ともにどのような姿を目指したいのかを各学年部で具体的に考えた(図18の第1次)。第2次に小・中学校の教職員で縦割り班をつくり、各期のつながりを整理した(図18の第2次)。縦割り班を作ることで、小学校高学年が中学校の目標を上回る設定になっていた等、お互いのズレに気づき、発達段階に応じでどこまで目指すのか小・中学校教職員で共有することになり、めざす姿が具体化していった。第3次にもう一度各学年部で、各期に身につけさせたい力を整理することで、「学びの指標」を少しずつ整えていった(図19)。学年部ではじめに意見を共有したことで、縦割り班での話し合いもスムーズに行うことができた。このように、第3次までの合同研修は、エキスパート活動とジグソー活動を組み合わせて行うことで、教職員一人一人が主体的に参加することや考えの共有につながった。

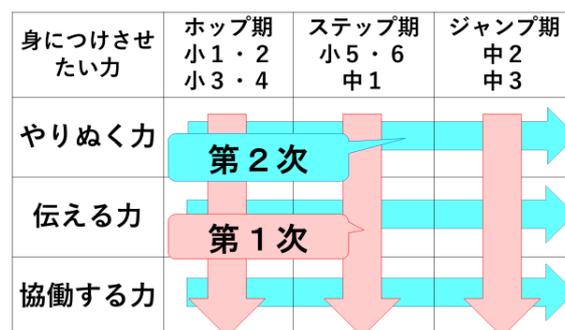


図 1 8 研修の流れ

担当	タブレット、評価分析
身につけさせたい力	<p style="text-align: center;"><b>やりぬく力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夢や目標を思い描く</li> <li>・夢や目標に向かって努</li> <li>・最後まで諦めずに挑戦する</li> </ul>
場面	<b>生活</b>

やりぬく力  
伝える力  
協働する力  
を学習面、生活面で  
分けて6つの  
「学びの指標」を作成

方向性	自分自身	集団・全体
低学年	<p>指示された自分のすべきことを行う。</p> <p>【具体例】靴そろえ、筆箱の整理、トイレの使い方、時間割の用意、チャイムで行動する。</p> <p>「挨拶」目を見る、元気よく、正しい姿勢、立ち止まって のうち一つでもできる</p>	<p>指示された当番や係などの仕事を、責任を持って行う。</p>
中学年	<p>自分で判断して、自分のすべきことを行う。</p> <p>【具体例】靴そろえ、筆箱の整理、トイレの使い方、時間割の用意、チャイムを意識して行動する</p> <p>「挨拶」：目を見る、元気よく、正しい姿勢、立ち止まって などができる。</p>	<p>自発的に当番や係の仕事を、責任感をもって行う。</p>
高学年	<p>他者との関わりを考えながら、自分のすべきことを行う。</p> <p>【具体例】筆箱の整理、身の回りの整理整頓、計画的な行動、トイレの使い方、時間割の用意、時間を意識し前もって行動する</p> <p>「挨拶」：目を見る、元気よく、正しい姿勢、立ち止まってなど場と状況に応じた挨拶ができる</p>	<p>学校全体のことを考え、自分の役割を自覚し、責任を持って取り組む。</p>
中学1年		<p>最終的には、4・3・2年間の発達段階に分類するので、高学年と中学1年は統合した</p>
中学3年	<p>学校全体・社会全体のことを考えながら自分のすべきことができる。</p> <p>【具体例】すべての生活面において自己管理ができている。(自律・自立)</p>	<p>係や当番の仕事を創意工夫しながら、1年間の見通しを持ってやりきる。</p>

具体例を書いて小・中学生にもわかりやすく

図 19 部会ごとに作成した「学びの指標」

「学びの指標」の作成を通して、中学校の教職員は小学生の発達段階を知り、小学校の教職員がどれだけ細かに配慮して学習指導を行っているのかを知ることができた。また、小学校の教職員は、15歳の卒業時に中学生がどのような姿を目指しているのかを知り、小学生の段階でどこまでを目指すべきかを考える機会になった。

(1)～(3)より、小・中学校教職員と児童生徒が中学校区の教育目標を達成するための合言葉をともに考え、発達段階グループでの話し合いや発達段階を越えた小中合同のグループでの話し合いを通して、カリキュラムのPDCAを始めるための評価の基準となる「学びの指標」を完成させることができた。

## VI 研究の成果

### 1 職員へのアンケートの結果から

4月の開校当初、教職員からは次のような意見が出された。

- ・小学校と中学校が一緒になって、どのように動けばいいのかわからない。
- ・中学生は（先生も含めて）話しかけづらいイメージがある。
- ・小学校または中学校でお互いにどのような活動をしているのかわからない。
- ・研修は小学校だけでやった方が、実態を把握しやすい。 など

12月になってもう一度職員に話を聞くと、次のような意見が出された。

- ・行事のときなど中学生が動いてくれてとても助かった。
- ・小中合同の校内研修の中で小学校の先生たちの丁寧な取り組みを知って、とても勉強になった。いい機会になった。
- ・開校当初は小学生に挨拶などの指導をすることに迷いがあったが、先生たちと話をすることで中学生と同じように指導ができてきた。
- ・今年1年間は学ぶことがとても多かった。

共通の組織構造を設定し、学校文化の醸成に向けて、小・中学校教職員の関わり合う機会を設定することを重点的に進めてきた。その結果、小・中学校教職員同士の交流が増え、お互いのズレを理解し、互いに譲り合い、協力しながら学ぶことができた。また、互いの強みを生かすことができた。

小中合同研修では、9年間の学びの連続性を意識した研修を行うことができた。小中合同で「めざす姿」を具体的に考えたことで、児童生徒の発達段階に応じた学びの大切さについて考えることができた。また、めざす姿は大きく変わらないということもわかった。

そして、行事等の作業や日常における会話を通して、普段から小・中学校の垣根のない関係づくりを進めていくことができた。年度初めのワークショップと11月に行った部会での活動の様子を比べると、職員の表情も和らぎ、協議もとても建設的なものばかりとなっていた。共通の組織構造を設定し、関わり合いの機会を増やして学校文化の醸成を目指すことは、小中一貫で教育活動を行っていく上で必要不可欠だということがわかった。

## 2 児童生徒アンケートの結果から

1 2 月に児童生徒および教職員アンケートを実施した。合言葉とした3つの資質・能力「やりぬく力」「伝える力」「協働する力」を評価するために、i-check と全学調質問紙調査の文言を参考に、各資質・能力を評価するための質問項目を15項目考えた。できるだけ i-check の質問項目を活用し、次年度に向けて P D C A に生かすことができるようにした。なお、以下のグラフはその一部である。「学びの指標」を基にした児童生徒および教職員アンケートは今回が初めての調査となるため、過年度との比較はできていない。

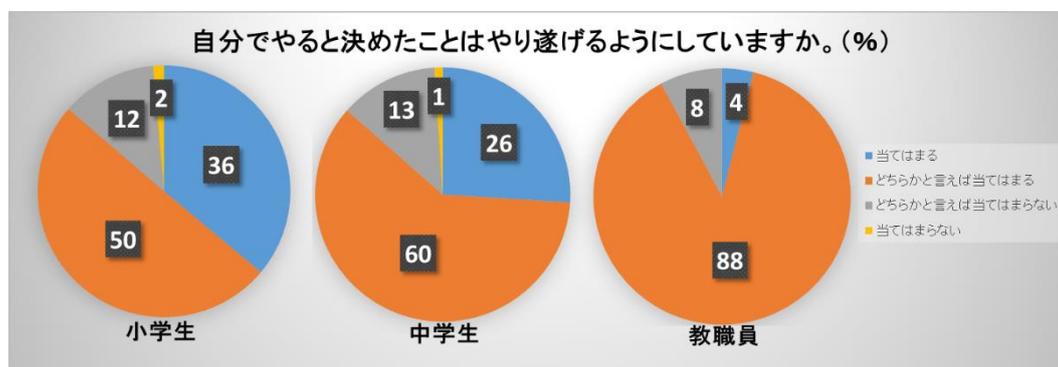


図 20 アンケート「やりぬく力」の結果

図 20 より、「やりぬく力」においては、小学校では 86%、中学校では 87% の児童生徒が、自分でやると決めたことはやり遂げるようにしていると答えた。また、同時に行った教師アンケートにおいても、児童生徒と同様の結果が得られた。これらのことから、児童生徒は最後までやり遂げようとする態度が育っているとと言える。児童・生徒と教職員のアンケートの数値のズレが少ないことから、小・中学校の教職員全員が同じキーワード「やりぬく力」を意識して教育活動にあたってきた成果だと考えられる。

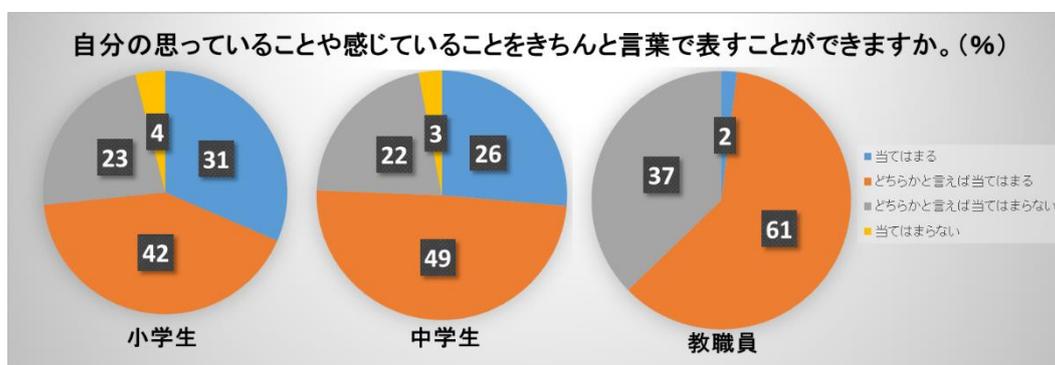


図 21 アンケート「伝える力」の結果

図 21 より、「伝える力」においては、自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができると答えた児童生徒

は、小学校では74%、中学校では75%見られた。しかし、残りの約25%の児童生徒が自分の考えを言葉で表現することはできないと答えており、課題が残る結果となった。教職員アンケートの結果からも、伝える力に課題意識があることがわかった。

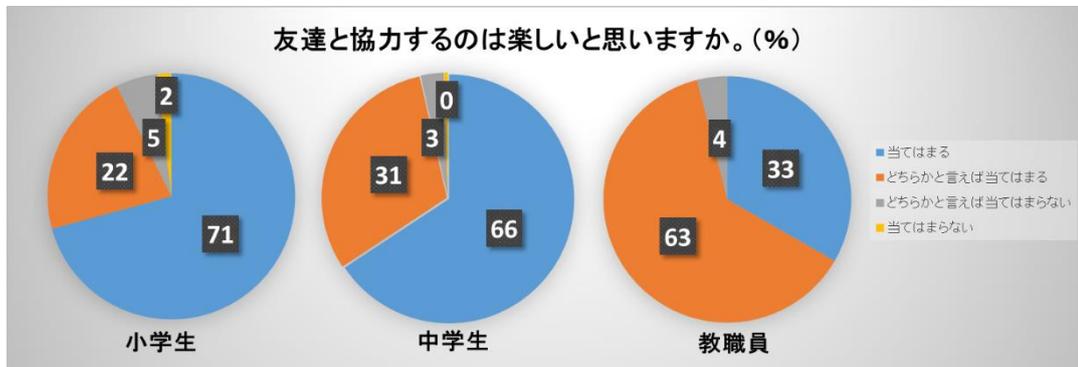


図 2.2 アンケート「協働する力」の結果

図 2.2 より、小・中学生ともに友達と協力することは楽しいと答えた生徒がほとんどであった。このことから、班活動などで友達の意見を聞いて自分の考えに取り入れ、新しい視点を見いだすことを児童生徒も有意義に感じていることがわかった。協働する楽しさ素地として、これから更に深い学びへとつなげていくことが今後の課題となることがわかった。

## Ⅶ 今後の課題と来年度に向けて

本研究は、小中一貫教育を進めるに当たっての土台づくりについて研究したものであるため、本年度は「学びの指標」の作成までを行った。

年度当初は、小学校と中学校が同じ施設内にあるため、自然と小中一貫教育は推進するものと考えていた。しかし、実際には同じ施設内にあるだけでは小中一貫教育は思ったように進まなかった。小中一貫教育を推進するためには、共通実践事項を両学校で実施するだけでなく、小・中学校の児童生徒や教職員が実感を伴って行っていくことが重要であると今年度の取り組みを通して実感した。「実感を伴って」行っていくためには、共通の組織構造の設定・学校文化を醸成する日常的な取組・目指す姿の共有に向けた計画的な小中合同研修は、小中一貫教育の土台としても欠かせないものであった。施設一体型だからできるのではなく、他の中学校区においてもこの視点は活用することができるのではないだろうか。令和 4 年度は、今年度に築き上げてきた基盤をもとに、小・中学校教職員と児童・生徒が一丸となって、9 年間の学びを生み出せるように研究を進めていきたい。

## おわりに

2021年4月に開校して9か月余りが過ぎ、同じ敷地内・校舎内に小学生と中学生、そして小中学校の教職員が共に学校生活を送る光景は日常となった。同時に、開校前には様々な思い等があった保護者や地域の方々にも同じ敷地内にある本校が受け入れられ、地域の学校として少しずつ定着しつつある。

本研究では、小中一貫教育の土台づくりを通して9年間の学びの連続性を意識した実践を行ってきた。多くの小中学校間では、「小中のズレ」を感じ、そのズレに向き合いながら、小中一貫教育の推進に当たっている。施設一体型の本校では、開校直後から「小中のズレ」を日常的に具体的事象として目の当たりにし、小中学校の教職員が実感せざるを得ない物理的環境に置かれることとなった。同時に、「小中のズレ」に向き合うことなくして、両校の教育活動を進めることが難しいことを受け入れていく必要もあった。

開校直後、小中の教職員間のコミュニケーションは少なく、同じ敷地内にあることへの戸惑いが感じられたが、様々な取組を通して、今では小中の教職員の何気ない会話から教職員同士のつながりが増え、小中合同研修の際には幅広い発達段階の子どもたちを対象とした深い学びをすることにつながっている。日常的に小中学校の教職員が時間をともにすることで、教職員同士がお互いのズレに向き合い、良さに気づき、認め合いながら9年間の学びの連続性を意識した実践を行うことができつつある。

義務教育9年間は成長段階の違いはあれ、小中の教職員が同じ子ども達を教育していくことに変わりはない。言い換えれば「小中のズレ」は「教職員間のズレ」でもある。今年度は、「小中のズレに向き合い、9年間の学びを生み出す小中一貫教育の土台づくり～共通の組織構造の設定、文化の構築、目指す姿の共有を通して～」を研究主題とし、「組織構造」と「学校文化」に着目し、小中一貫教育推進のための土台づくりを目指して取組を行ってきた。この取組は、本校だからできたことではなく、どの学校でも取り組めることである。小中学校が同じ敷地内にあることは大きな利点だが、それ以上に教職員間のつながりの深さが小中一貫教育には欠かせないものであることがわかった。

開校初年度、本校の小中一貫教育の土台づくりに注力してきた。次年度以降も同じ屋根の下（施設一体型）の教職員として、さらに実践を行っていききたい。

合志楓の森小学校 校長 角田 賢治

【引用文献】

- 1) 妹尾昌俊『思いのない学校、思いだけの学校、思いを実現する学校ー  
ビジョンとコミュニケーションの深化』学事出版,p97,2017
- 2) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵『カリキュラムマネジメ  
ントハンドブック』ぎょうせい,p37,2016
- 3) 太田恭司「カリキュラム・マネジメントのための学校経営グランドデ  
ザイン」,熊本大学教育実践研究論文,pp.2-5,2019

【参考文献】

- ・中央教育審議会 初等中等教育分科会 資料2 小中連携、一貫教育  
に関する主な意見等の整理

なお、本研究に関連する様々な小・中学校における取組は、小・中学校  
両方のホームページに随時発信している。下のQRコードを参照いただ  
ければ幸いである。



合志楓の森小学校  
ホームページ



合志楓の森中学校  
ホームページ